

北野 昭彦著

『宮崎湖処子の詩と小説』  
国木田独歩

森 本 隆 子

『宮崎湖処子の詩と小説』（一九九三年六月三日発行、和泉書院）。  
『国木田独歩の文学』『国木田独歩「忘れえぬ人々」論他』に次ぐ北  
野昭彦氏の大作に、たとえば副題として「コンテクストとしての  
民友社文学」と銘打ってみる誘惑を禁じえない。

近年、作品論の集積から一人の作家を読みうるなどという幸福  
な夢想を抱いている者は一人もいないし、作品の完結性≡自閉性  
という楽天的な等式は少しずつ切り崩されつつある。作家の伝記  
の生涯が、その作品に影響を与えずにおかないのと全く同様に、  
作品が同時代テクストと無媒介に関わり合い、より広範な同時代  
の文化的コンテクストへと限りなく開かれていることは、もはや  
自明の前提である。本書における北野氏の問題意識も、まずは湖  
処子文学と独歩文学の同時代性に発し、湖処子から独歩への継承  
と飛躍が論じられ、それを追求するための有効なパラダイムとし  
て「田園文学」の枠組みを設定しているわけだが、何よりも見落  
としてはならないのは、さらにその背後で機能し続けている「民  
友社文学」のコンテクストではないのだろうか。

単なるジャンルとしての「田園文学」の考察ならば、本書も引  
用する前田愛氏の「明治立身出世主義の系譜」が、「帰省」とい  
う括り方で早くに方向性を示していたし、たとえば滝藤満義氏の  
「様々な帰郷」などは、その具体的検証と称してさしつかえない  
だろう。一方、森英一氏『明治三十年代文学の研究』は、明治三  
〇年代文学の横断面から、独歩を包摂しながらも、むしろ宙外、  
蘆花、藤村を中心とした田園文学のジャンルを見事に切り取って  
いる。しかも、一瞥してわかるように、明治二〇年代にクライマッ  
クスを迎える「帰省小説」のジャンルと自然主義の様相を深めた  
明治三〇年代の「田園文学」のジャンルは、脈絡をもたず切り  
離されたまま、それぞれ別々にカテゴライズされているのだ。こ  
のような研究史の現状は、また両ジャンルに足をかける独歩文学  
が当然、孕まざるをえないロマンの側面と自然主義的側面との矛  
盾、より広くは明治二〇年代ロマン主義と俗に言う明治三〇年代  
の前期自然主義の相関をいかに読み解くかという明治文学研究史  
上最大の難所を指し示しているわけである。

ところが、本書において、それらを論じる有効な切り口として  
民友社文学のコンテクストが提起されてみると、二つのカテゴリー  
が本来、一つに落ち合って「田園文学」の系譜とでもいうべきも  
のを形成していたことに改めて気づかされる。そもそも「田園」  
への関心自体が民友社の平民主義、つまりは蘇峰提唱するところ  
の「田舎紳士」論に一つの淵源を持つことを指摘されてみると、  
明治二〇～三〇年代の田園文学に底流する「近代化を担うべき豪  
農層」帰省（故郷）小説→ローカル色豊かな自然文学」という流  
れが鮮やかに見えてくる。あるいは、湖処子の田園文学がすでに  
民友社固有の社会性を孕み持つ構造は、そのままロマン性と現実  
直視の両極を振幅する明治二〇～三〇年代「田園文学」を解説す  
る貴重な鍵ともなろう。本書がたびたび指摘する「湖処子によっ  
て開拓され」「独歩によって完成され」「後統の蘆花・花袋・藤村」  
へ続いてゆく「田園文学」は、いわば民友社コンテクストに支え  
られることで、初めて一つの系譜性を顕在化させているのだ。そ  
れは、文学史の塗り替えなどという域を超えた文化的社会的コン  
テクストとしての民友社文学の発見ではなかったらうか。

以下、この視点から本書のおおよその内容について、若干の間  
題提起をまじえながら概観を試みたい。

まず第一章「宮崎湖処子『帰省』と『故郷』」に取材した諸作「  
第二章「宮崎湖処子『村落小記』再見」第三章「宮崎湖処子『自  
然児』試論」第四章「宮崎湖処子『人寰』論」は、田園文学の開  
拓者としての湖処子文学の特質と意義を民友社派の文学論を光源

として照らし出したものといえるだろう。

明治二〇年代の民友社派を代表する作家でありながら、現在、  
不当にも「帰省」わずか一作で名を留める湖処子であるが、本書  
はその不遇が、彼が籍を置いた民友社の文学そのものの文学史上  
における冷遇視と重なり合っていることを示唆してくれる。たと  
えば「帰省」。かつて北野氏は「帰去来」論（『国木田独歩「忘れ  
えぬ人々」論他』所収）において、これと独歩「帰去来」との差  
異を問い、「田園文学」のパラダイムの中で、きわめてシャープ  
に論じたことがある。そこで展開された鮮やかな論旨——「帰  
省」とは「知慧の果」を食って上京した農村出身者の失業園、つ  
まりは故郷喪失と痛切な回帰願望の物語である、とする読みの基  
本は、本書でも踏襲されて動かない。しかし、これまたすでに指  
摘すみの豪農に生まれた三男という湖処子の出自に、ここで改め  
て民友社派の文学論を重ねてみると、彼こそが蘇峰提唱するところ  
の「田舎紳士」であったことに気づかれる。すなわち豪農・地  
主を地盤とした自営自活の田舎紳士とは、まさしく彼の出身階層  
そのものであり、とすれば「帰省」の背景には「田舎人の眼」を  
以て「田舎の消息」を描出する「田舎紳士」の文学を待望し、ひ  
いては近代化推進の主体を、藩閥権力から彼らの手へ奪回せんと  
する民友社の平民主義が静かに流れていたのだといえるだろう。  
そして、この民友社の平民主義を視座として、忘れ去られた湖  
処子文学の全貌を見渡してみると、都会に在って故郷を詩化する  
「帰省」とは裏腹な、平民主義そのものの具現とも言いうる、き

わめて社会性の濃い作品群が浮かび上がってくる。「帰省」を「無韻の詩」（蘇峰評）とするならば、それらは地方農村の現実を直視、描写したもので、湖処子自ら「田家小説」と命名するところの系譜であり、いうまでもなく花袋、藤村の自然主義文学を先取りしたものである。ここに、等しく故郷、もしくは田園を素材としながら、ロマンの憧憬とリアルな現実描写に引き裂かれる湖処子文学の全体像が、初めて開示されたと言っても過言ではない。

湖処子の埋もれた作品群の中から本書が取り上げているのは、主に「村落小記」「自然児」「人寰」の三作であるが、とりわけ「村落小記」と「自然児」が湖処子のこの両極性を端的に示している興味深い。「村落小記」は新時代の農村に押し寄せた秩序改革の様相を肯定的に描いたもので、地方産業の振興、その担い手としての平民出身の子弟たちの向目的生き方を活写する。これを湖処子文学の平民主義的側面とするならば、「自然児」は、あたかもその代償行為であるかのように、現実的視点を一挙に後退させたもので、農村は再び神話的モチーフとさえ相俟って、桃源郷と化している。都会に在りながらやみがたい郷愁の対象となり続けていた湖処子の「故郷」は、ここでは主人公「自然児」の無垢な少年性に仮託されながら、帰るべき始源の世界として形象化されているのである。これこそが湖処子文学から平民主義の影響を差し引いて、なお残る残余の部分、いや独自性であることはいうまでもない。

の発想とは対照的な、父の離再婚、相次ぐ転任がもたらした故郷の喪失、郷土からの遊離であり、文学的発想としては、この「漂遊の児」（柳田国男評）の性格が形づくった二つの柱である。一つは他郷者感覚——「住み慣れぬ旅人の眼で対象との新鮮な出会いを切り取ってくる人生観照の態度であり、二つめは世俗的価値観の転倒がもたらした「小民」の発見である。エトランゼ感覚とは、おそらく独歩自身の愛用語「驚異」を一般化したものと思われるが、世俗的因習、習性からの解放を可能ならしめる「驚異」志向は、『国木田独歩の文学』のキー・ワードであり、今、着目したいのは後者の転倒性である。

社会の底辺に無意味な生涯を送る凡俗の小民を価値化することは、名利、成功に捉われた世俗的価値観、ひいては若き日の政治青年独歩自身からの、まさに根本的転倒である。北野氏が説くように、その背後に、土俗に根ざした共同体的関わりよりも時空を超えて遍在する者たちとの瞬間的默契を志向する「漂遊の児」的的人生観が機能していることは間違いない。『国木田独歩の文学』は、小民を、社会的現実を克服できなかった独歩にとつての代償的存在として把握していたが、その消極性は、鍵概念「驚異」そのものの、世俗的価値からの瞬間的逸脱とも見えかねない性格と大いに関わっているだろう。本書における世俗的価値基準からの逸脱ならぬ転倒を俟って、「小民」は、初めて独歩文学の特異性を明かす要の位置づけを得たといふべきであろう。独歩文学の基層と特質を一直線に結んで、その魅力の構造を開示する〈転倒〉

湖処子文学と民友社文学との重なりは、結果として、そのズレをも鮮明に際立たせることになったと評すべきであろうか。ここに、民友社文学からはるかに大きくはみ出した湖処子固有の〈故郷〉像、すなわち土俗的な農村共同体の世界にあまりにも深く呪縛された湖処子文学の特質が、鮮やかに照射されてくるのである。

続く第五章「宮崎湖処子と国木田独歩」は、心はつねに故郷に帰る湖処子文学と相対させながら、実体的故郷の喪失者である独歩の自然観を論じて、湖処子論から独歩論への接点を示すものとなっている。きわめて土着的な湖処子の郷土意識に対して、独歩の場合、〈田舎の各地〉が〈心の故郷〉と化し、ひいては現実の桎梏から飛翔した〈天外〉の〈自由の郷〉へと昇華されてゆくという基本構造は、すでに前々著『国木田独歩の文学』が明快に取り出していたところでもあるが、ここでは特に、両者の詩編に着目しながら、その差異が具体的に探られている。中でも「山林に自由存す」論は、山林が遠望の姿勢を以て遠くから思慕する対象でありながら、それ故に〈自由〉の象徴へと昇華される逆説的構造を、詩型の自由や韻律、詩句から説き明かして魅力的である。両者のこの特質は、さらに、それぞれ郷土に対する〈定住〉の発想と〈非定住〉の発想——浪漫主義の二つの祖型としてパターン化されて示唆的であるが、本書全体の流れからみれば、むしろ、湖処子の故郷像を梃子にして炙り出されてくる〈独歩文学の特異性〉にこそ、注意は喚起されるべきであろう。独歩文学の特異性とは、まず基層としては、湖処子の〈定住〉

の発見と説明は、本書最大の収穫であろう。

第六章「国木田独歩の〈精神上の大革命〉」第七章「民友社精神と国木田独歩の『源おち』」第八章「国木田独歩『武威野』論」は、この〈転倒〉を引き起こすメカニズムについての精緻な論証であるが、特に、それを民友社コンテクストとの関わりと離陸、すなわち〈受容と創造〉の視点から考察している点に着目したい。

独歩における価値観の転倒、すなわち小民の価値化は、周知のごとく明治二五年秋の「精神上の大革命」を契機とするわけだが、北野氏は、この精神革命のメカニズムを、蘇峰の平民主義からの影響と自立という視点から見事に解説してみせる。すなわち、精神革命の直接的導火線ともいふべきカーライルの『英雄崇拜論』との出会い、および自然への開眼は民友社、わけでも蘇峰の影響なくしてありえないが、カーライルの英雄観から小民発見へのさらなる展開は、植村正久のワーズワス論の媒介なしにありえない——これが北野氏の精神革命論の骨子である。確かに蘇峰の平民主義は、「口碑」「旧人民の生活」の尊さを独歩に教えたものの、小民の人間の価値を感得し、それを文学表現へ形象化するためには、植村の持つ一種の哲学性、換言すれば平民観には決定的に欠如している内の深さを必要としたのである。植村の「自然界の予言者ウォルズワース」に見られる「偉人も、陋巷に生まれて陋巷に死するものも（中略）たゞ人類」「取るに足らずと見做せるものうちに極美極大なる意義真理の存す」などの字句と独歩の小民観の重なりを考証しながら、独歩文学における小民像

形成の基盤を探つてゆく北野氏の手際は実に鮮やかで、また、植村受容を機に独歩が蘇峰、および湖処子「帰省」の批判者へ転じてゆく道筋の展開は、きわめて説得的である。

なお、民友社文学の影響の具体的作品への反映としては、「源おち」と「武蔵野」のケースが挙げられている。「源おち」の場合、人性・人情の「不可測の深淵」を探求せんと呼びかける蘇峰の文学論を下敷きにした時、初めて一篇のポイントは「山の蔭、木の辺」に沢なる小民の意味ある一生、つまりは源の「開く事叶はぬ箱」のごとき内奥の秘密に絞り込める。それは、程度の差こそあれ、実生活上の破婚体験の投影を免れえず、作品の意味を孤独と愛のエゴイズムに解消してきた従来の「源おち」研究からの、見事な跳躍である。また「武蔵野」論では、日本人の自然観の革命とも称すべき落葉林の発見が、蘇峰による新しい自然文学の提唱、二葉亭への「あひぶき」の翻訳依頼という二重の媒介を経たものであることが指摘される。とりわけ「あひぶき」の感覚、表現が、愛唱、作中への引用（筆写）などのリズムの反復を通して、しだいに独歩その人へと乗り移り、その口語文体を開花させてゆくプロセスの検証はきわめて精彩に富むものとなっている。

最後のセクション、第九章「独歩『忘れえぬ人々』のパラドックス」第十章「国木田独歩『運命論者』の衝撃」第十一章「国木田独歩『春の鳥』と『画の悲み』」第十二章「国木田独歩『竹の木戸』論」は、著者自身の言を借りるならば「短篇スタイルの開拓・完成」を論じたもので、そのため珠玉の短篇群が取り上げら

れているわけだが、筆者としては、これをあえて独歩における〈転倒〉のヴァリエーションとして括りながら紹介しておきたい。なぜなら、氏の読みに従えば、これら諸作の構造には、共通してその基底に〈転倒〉が仕掛けられていることに気づかれるからである。「忘れえぬ人々」では、人の交わりの深淺と時間の長短、および友情・恋愛の有無との相関性に二重のパラドックス——つまり転倒を潜めることで、それを機軸に「忘れて叶ふまじき人」から「忘れえぬ人」への価値の転倒がなされている。同様に、「運命論者」「竹の木戸」は、人生に対する主体性や積極性が、不条理な運命に瞬く間に巻き込まれて自滅を余儀なくされてゆく物語であり、氏はこれを近代——人間の意志や主知性に信頼を置く近代的常識に対するパラドックスへと収斂している。

そもそも「源おち」「武蔵野」も含めて本書の後半は、独歩文学の基底に潜む〈価値の転倒〉の華麗な変奏の趣さえ持つているわけだが、中でも二重の転倒を巧みに織り合わせながら紡ぎ上げられた名篇「忘れえぬ人々」の読みは圧巻である。「忘れえぬ人々」の難解さは、たとえば同じ「山林海浜の小民」を描く「源おち」が短篇小説のセオリーに則つて、源叔父の人生の経過を中心に物語化されているのに対して、三つの小民像が、何ら物語性とは無縁な瞬間的な印象描写においてしか捉えられていない点にある。しかし、ここで北野氏は、むしろこの抽象性を積極的に評価して、小民と「周囲の光景」との「美しき配合」が成つた一瞬に彼らの営みの意味深い結実を読む。大津の語りを展開する、その時間的

移りの過程に浮上する三つの心象像の連続を、連句の付け合ひに見立て、響きになぞらえるのである。それは、現在の「忘れえぬ人々」論の最高峰を示す読みであろうが、一つの不満を覚えるのは、氏が、「忘れえぬ人々」におけるセオリー破りを論の前提とし、それを作品の特異性として積極的に評価しながら、にもかかわらず、大津の語り、もしくは時間的展開に物語性の「付与」を認めようとする点である。氏の論に見られるこの若干の揺れは、おそらく従来の諸論が表明してきた、各小民像の「内容」が「具体」性を欠き（中島健蔵氏）、「物語」世界を支えるに足る「手だて」を持たない（滝藤満義氏）、という不満とも一致する。

ところが、北野氏が提起する「俳句」の概念は、筆者などには物語的因果性の積極的な廃棄を夢想させずにはおかない。〈転倒〉とは、小説のセオリー、常道に対する転倒にも通じてはいしなかつたか、と。この発想は、本書も言及する柄谷行人氏の論を置いてみると、いっそう見やすい。柄谷氏の『日本近代文学の起源』は、同じく「忘れえぬ人々」に「根本的な倒錯」を指摘するのだが、柄谷氏のいう転倒は、むしろ近代文学の出現そのものが孕む転倒性の比喩である。近代の成立とは起源の問題ではなく、記号論的な布置そのものの転倒である、というのは氏の一貫した主張であるが、物語性を伝統に、俳句、なかならず連句の付け合ひを、それへの裏切りと置き換えてみれば、実は「忘れえぬ人々」における物語の廃棄こそが、柄谷氏のいう「悪意」ある「ねじれ」、つまりは近代の出現であつたように思えてならないのである。

実は、筆者のこの粗雑にすぎる仮説は、しかし、北野氏が同じく最後のセクションで取り上げているもう一つ作品「春の鳥」の読みに触発されたものである。というのも、氏は「春の鳥」に、ロマン性に亀裂を走らせる近代的知性の確実な働きを読み取っているからである。それは、作中、六歳少年の「白痴」という属性に自然性、ひいては天上性を見ようとする幻想を抑止して、その痛ましき、地上性を事実として提示する。ここで、たとえば田園文学におけるロマンチズムの一つの典型として、湖処子文学、ひいてはワーズワスにも見られるような原初性、神話性を想定してみれば、確かに独歩に見られるような郷土からの遊離そのものが、血縁・地縁の桎梏から解放された近代性であると同時に、土俗的世界に対する裏切り行為であつたらう。あるいは、そこにこそ、近代小説の始祖たる独歩の面目は躍如としているのかもしれない。「春の鳥」が浪漫主義と近代主知主義の「微妙な均衡」の上に成り立つ作品であるように、「忘れえぬ人々」は、小民像を、「源おち」の物語的世界から最高度に近代性の極へと振つた、究極の作品ではなかつたらうか。

思えば、独歩文学に内在するロマン主義と近代性との葛藤とは、早くに北野氏自身が『国木田独歩の文学』において指摘していたロマンチズムとリアリズム、「天地生存の感」と「社会生存の感」の相克を想起させる。拙論が冒頭に提示した民友社文学のコンテキストから捉え直せば、前者が湖処子文学のロマン性、後者が民友社派の社会性の流れを汲むものであることは言を俟たない。

北野氏が独歩文学について直観してきた両極性は、そもそも民友社文学のコンテクストが内包する二面性でもあったわけで、それは、せめぎあいながらも決して分かれたることなく、深く根底で結び合っているのである。北野氏が『国木田独歩の文学』で提起し、『国木田独歩「忘れえぬ人々」論他』ではとりあえず個々の作品について試みた独歩文学の統一的把握は、本書において見事に回答を与えられたというべきであろう。

(もりもと・たかこ 静岡大学助教授)

## 立命館大学日本文学会会則

### 第一章 総則

第一条 (会の名称)

本会は立命館大学日本文学会という。

第二条 (会の本部)

本会は本部を立命館大学文学部日本文学専攻内に置く。

第三条 (会の目的)

本会は日本文学の研究を推進すると共に会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 (会の事業)

本会は次の事業を行なう。

- 1 大会・研究会の開催
- 2 機関誌「論究日本文学」の刊行
- 3 その他の事業

### 第二章 会員

第五条 (会員の資格)

本会の会員は立命館大学文学部日本文学専攻の専任教員(元教員を含む)・卒業生・在学生とする。

第六条 (名誉会員)

元専任教員で定年退職した者は名誉会員とする。

第七条 (会員の活動)

会員は本会の事業に参加し、機関誌の配布を受ける。

第八条 (会費の納入)

会員は会費を納入するものとする。但し名誉会員はこの限りではない。

### 第三章 役員

第九条 (役員)

本会に次の役員を置く。

- 1 会長
- 2 評議員
- 3 会計監査
- 4 編集委員
- 5 談話会委員
- 6 国語教育セミナー委員
- 7 運営委員
- 8 学生部会役員

第十条 (役員任期)

役員任期は一年とする。但し重任を妨げない。

第十一条 (役員選出)

役員は総務において選出する。

第四章 組織および運営

第十二条 (総会)

総会は年一回開催し、当該年度の事業その他の事項について審議決定する。但し必要に応じて会長は臨時総会を召集することができる。

第十三条 (評議員会)

評議員会は本会の運営について協議し、総会に原案を提出する。

第十四条 (学生部会)

学生部会は専任教員の助言のもとに学部学生によって運営する。

第五章 会計

第十五条 (経費)

本会の経費は会費・寄付金・その他の収入による。

第十六条 (会計報告)

会計報告は総会において行なう。

第十七条 (会計年度)

本会の会計年度は毎年六月一日に始まり、翌年五月末日に終わる。

第六章

第十八条 (会則の変更)

会則の変更は総会において行なう。  
付則

この会則は一九九二年六月九日より施行する。